

INTERVIEW

震災を語り、未来を守る — 次世代へつなぐ伝承のかたち —

悲しみの場所から、未来をひらく場所へ

— 大川小で語り継ぐ、日常の尊さ —

大川伝承の会 共同代表 佐藤 敏郎さん



石巻市の大川小学校では、避難の遅れにより、佐藤さんの次女を含む児童 74 人と教職員 10 人が死亡・行方不明となりました。「娘が毎日笑顔で通った学校。娘と一緒に案内しているつもりで、ここに立っています」と佐藤さんは話します。震災遺構となった大川小は、今も県内外から多くの人が訪れる学びの場となっています。

語り部活動の原点にあるのは、ここにあった「町」「日常」「学校」——命が輝いていた証をなかつたことにしたくないという強い思いです。震災前の暮らしや学校生活を想像してもらいながら、あの日突然それが失われた事実に向き合う。遺族としての悲しみも、子どもたちを守らなかった教職員の無念さも伝えています。「未来は、あの日の校庭に向き合った先にある」。校歌「未来をひらく」のタイトルの通り、希望を持ち帰れる「未来をひらく場所」にしたいと願っています。

そして、「どうすれば命を守れたのか」という問い。元教員でもある佐藤さんは、「大事なことは普段の暮らしの中に。“もしもは、いつもの中にある”」と、事前防災の大切さを伝え続けています。日常を大切にすることこそが命を守る第一歩。その思いは若い世代にも確かに届き、大学生が自らの言葉で語り継ぐ活動へと広がっています。悲しみと向き合いながら、未来へ命のバトンをつないでいく——その挑戦はこれからも続きます。



東北大学生による語り部活動の様子（年数回開催／参加無料／予約不要）



東北大学 災害科学国際研究所 佐藤翔輔 准教授

震災伝承は、災害の体験を未来に手渡し、未来の命や生活を守る知恵と勇気を与えてくれます。「経験者の語り部が事実と重みを伝える一方、若い世代の語りは学びを自分の言葉に置き換え、未来へ伝えていく力を持つ」と佐藤翔輔准教授は話します。時間の経過とともに記憶は薄れていきますが、語り継ぐ形は一つではありません。「大切なのは、震災を“特別な出来事”として遠ざけるのではなく、日々の暮らしと結び付けて考えること」。震災の教訓を日常の判断や備えに生かすことが、次の命を守る力になると指摘します。

伝える人、聞く人、一人一人が担い手となることで、震災の教訓は未来へと受け継がれていきます。

震災の経験や教訓は、それぞれの心に残る“特別な記憶”であると同時に、私たちが受け継いでいくべき“命の記憶”。あの日を語り継ぎ、未来を生きるために——。今日できる小さな備えが、未来の命を守る力へ。

復興支援・伝承課 ☎022(211)2443

記憶のない私たちが語る震災と未来

— 次世代へつなぐ教訓 —

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館 小中高生の語り部



海岸近くにあった気仙沼向洋高校の旧校舎は、津波が4階の床下まで達した場所です。震災当時の状態を保ちながら震災遺構となったこの場所で活動する小中高生の語り部は、震災当時を経験していない、または記憶にない世代です。館内では、毎月1回、小中高生による「みんな語り部」も開催されています。

今回お話を聞いた福岡さんと芳賀さんは、中学1年生から語り部を始めました。きっかけは「家族の影響」や「興味があったから」という等身大の理由。それでも、来館者から向けられる真剣なまなざしや「ありがとう」の言葉に触れるうち、活動は次第に使命へと変わってきたと言います。

「記憶がない自分が語っていいのか」という迷いを抱えながらも、声の抑揚や間の取り方を試行錯誤し、震災当時の出来事を丁寧に学び、考え、自分の言葉で伝えようと努力を続けています。

震災を知らない世代が増えていく今、2人は「知っている世代と知らない世代をつなぐこと」が自分たちの役割だと語ります。来館者の反応を受け止めながら、自分たちの言葉が誰かの防災意識につながっていくことに、確かな手応えも感じています。記憶や教訓を風化させず、命を守るために伝え続ける小中高生たち。その思いは、確かに未来へと受け継がれています。



震災遺構の気仙沼向洋高校旧校舎 高校生から高校生への伝承

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館 高校生語り部 福岡未央さん、芳賀世剛さん（p.5インタビュー掲載）

県内では今も、多くの方々「あの日」を語り継ぐ活動に力を尽くしています。被災地に立ち続ける語り部や、震災を記憶していない世代の若い語り手、そして地域の記憶を未来へつなぐための教育・研修・展示の取り組み——。その形はさまざまですが、共通しているのは「記憶や教訓を未来の命につなげたい」という切実な思いです。各地の伝承施設では、震災の事実を正確に伝える展示や案内に加え、被害状況の背景、避難判断、そしてどうしたら守れたのか、を共に考える場づくりに取り組んでいます。また、学校や地域では、防災教育やワークショップを通じて、子どもたちが主体的に災害について考える機会が広がっています。中でも近年は、震災を知らない学生が語り部として活動に加わるケースも増え、次世代の言葉で語られる「震災の教訓」の輪が確かに広がりはじめています。こうした取り組みを県としても支えるため、伝承活動のネットワーク化や語り部の育成を行う団体への支援など、さまざまな施策を進めています。伝える側が安心して活動できる環境づくりを支えながら、世代を超えて記憶を共有し、学び続けられる場を未来へ残していく——それが



大川小の校庭に描かれた壁画「未来を拓く」

県が目指す「伝承のかたち」です。震災の記憶が薄れていく一方で、あの日を語り続ける理由が確かにあります。失われた命に向き合い、教訓を学び、未来へ生かすために。語り部の言葉や学びの場は、今日を生きる私たち一人一人の「行動」へとつながる大切な力となっています。

あの日を、未来へつなぐ。

被災地から、次の世代へ—— 学びと希望のバトン

平成23年3月11日に発生した東日本大震災から、間もなく15年。一人一人に刻まれた「忘れられない記憶」は、今も私たちの歩みに深く根付いています。今、私たちが大切にしたいのは、伝えていく力。震災を知らない世代へ、あの日々の記憶と教訓をどう受け継いでいくか——その思いを共に見つけ、未来へつなげていく。

